

sweet revenge

razoredge

sweet revenge

終電前後の歌舞伎町は、旧コマ劇場周辺。点在する客引きたちとその点在によって堰かれるヒトの群れをけばけばしい彩りのネオンが執拗に舐め回している。

靖国通りを背にすると、電話ボックスが幾つか並んでいる。

一番街方面から圭祐が歩いてきた。二十代半ば乃至は三十。派手なシャツをはためかせ、かたぎともやくざともつかない。ブラシを用いずに梳かした髪は肩に掛かるくらい伸びていて、ともすると視界を遮る前髪をしきりに掻きあげている。

電話ボックスが並んでいる辺りで、圭祐は立ち止まり、胸ポケットに突っ込んでいたタバコのソフト・ケースと使い捨てライターをとりだした。太宰治の小説にも登場する古いタバコだ。ヒトの流れは一筋ではなかったが、趨勢は靖国通りへ向かっていた。

ふと圭祐は辺りを見回した。

行き場のない若い娘がぼつりぼつりと見当たった。モバイル機器のディスプレイの放つ光が彼女たちの貌をざっくりと抜粋している。

スロットで辛勝した。一番街でとんこつラーメンを喰べた。そもそもリーチの短い両切りタバコの火種から伝わってくる熱が指先を焦がしそうになった。ゴールデン街しか選択肢はなかった。喫いさしのタバコを路肩に棄てたとき、声を掛けられた。

振り向くと、若い娘だった。一目でアン

ダー・ハイティーンだと判る。

「うん？」

家出少女だろうか。その存在は、盛り場と馴染むことを拒絶していた。切迫している様子だった。

「拳銃、貸してください」

震える声が懇願した。巫山戯ているふうではなかった。

昼間なら喫茶店でもよかったが、相手が未成年というだけならまだしもあるいは中学生かもしれないなかった。補導や職質を避けるべく、圭祐は顔馴染みの店に連れていった。

まさか淫行かと常連どもは囁したが、圭祐の目配せでそれは収まった。ママは何も訊かず、席を用意した。

「ビールと……お前何呑む？」

俯いた少女はかぶりを振る。華奢な肩が尖っている。ひどく緊張しているらしい。

「あ、そうだ。お前、名前は？」

「リオ」

ビールと克蘭ベリー・ジュースが供された。

「事情話せよ？」

「。パパを撃ちたい」

呆気にとられて、店に居合わせた人々の耳目という耳目が集まっているのに気づいた。圭祐がさりげなく睥睨すると、彼らは聴いていないふりをした。

少女の父親は、つい最近、離婚と同時に再婚した。

中学にあがったばかりの少女に家庭崩壊は堪えた。一方的に離縁された母親は変調をきたしたという。「去年の年末の同窓会で再会した小・中の同級生と同窓会以来、不倫してて……」

父親は四十代半ばとのこと。

「。パパとママは、仲良くはなかったけれど、一方的過ぎる」

父親と母親は見合いだったという。大手に勤務していた父親は数年前に映画監督になりたいと云いだして会社を辞め撮影現場で下働きを続けている。新妻は初婚だが長年家事手伝いで四十代半ばにして夢見がちな人物らしい。

「うざいから殺したいんだ」

「年末って云ったらまだ一年も経ってねえよな？ いい歳したおっさん・お婆さんの行動じゃねえな。」

見合いつてことはハナつから政略結婚だったのかもしれないけど、お前いるんだもんな？ ムカつくの、すげえわかるよ」

端正なりオの貌が崩れた。人目も憚らずに慟哭をはじめた。

圭祐は居合わせた人々に参ったという表情をみせた。

リオが落ち着くのを待つ間、圭祐は、黙ったままだった。考えを巡らせているようだった。「殺すことはねえ。でも、懲らしめてやろうぜ？」

リオが訝る素振りをみせた。

四十代も半ばに差し掛かると、終日屋外のロケはきつかった。

撮影の帰り、泥酔した若い女が駅のホームでしなだれかかっていた。正体をなくしている。稔はお人好しだった。介抱してやることにした。乗ろうとしていた電車を見送り、ベンチに

女を座らせ、わざわざ自動販売機でミネラル・ウォーターを買い、女に吞ませてやった。夢うつつの女とのコミュニケーションは成り立っていないようで辛うじて成り立っていた。

女は美形だった。新妻とはいえ同級生である妻がもう具えていないものをまだ具えていた。体勢を崩して転落しそうになった女を支えようとして交錯した。

潤んだ眼が稔を射貫いた。

佳代は買い物をしているところを若い子にナンパされた。端正な貌たちで、華やかな髪型をしていた。

「からかわないでください」

「好みなんです。歳は別として」

面食らったものの、率直さに吹きだしてしまった。

主人は撮影で遅くなると云っていた。

遅くなる。先に寝てて。おやすみ。

テキストを送信すると、泥酔した女を連れ
 穂は器用にモバイル機器を仕舞った。

ホテルに入ろうとしたとき、一組のカップルが
 現れた。

オフのホストと客の女らしかった。

穂は彼らから視線を外そうとした。客の女
 も穂たちから視線を外そうとした。だが、穂
 も客の女も貌を互いに視線を戻した。

穂と佳代だった。

「穂くん」

「佳代ちゃん」

ホストは、穂と佳代を交互に見遣ってから、
 苦笑を浮かべながらフェード・アウトした。

泥酔した女はにっこり笑ってから、ハンドバッグ
 で穂を撲って去なくなった。

ホテル街の路上、対峙する中年カップル。

物陰から彼らの様子を窺っていたのは、リオ
 と圭祐。ホストも泥酔していた筈の女もそれに
 倣っていた。

ホストと泥酔女にカネを渡し、圭祐がリオ
 を送る。

「お前の親父は恣にしか生きられないイヌネ
 コと大差がない。けどよ、そんな奴ごまんと
 いる」

リオは圭祐の言葉を咀嚼しながら虚空を
 見遣る。

「フアックな大人だらけだし娼婆は腐ってい
 る。けどよ、とりあえず生きてみるよ？」

「あ、そうだ？　なんで俺に声かけたんだ？」

『拳銃手に入れるんなら歌舞伎町』ってお
 もったんだけど、危なさそうなのとぼっか
 怖じ気づいちゃって……」

「俺は安パイ？」

「少なくとも悪そうにみえなかった」

空車のタクシーが通りかかり、圭祐がそれ
 を止めた。

ドア・ウインドウが降り、リオが貌を覗かせ
 る。

「負けんなよ？」
「うん。ありがとう」